

七階の住人

宮本百合子

青空文庫

「お早う」

ミセス・コムプソンが入つて來た。

「今日は御部屋ですか」

彼女は、亞麻色の髪を古風な束髪にし、雜使婦そつくりな藍縞の服に長い前垂をしめて
いる。

「お早う……」

伸子は、丁度襟カラをつけかけていた衣服を両腕ですくいあげながら寝台から立上つた。

「私、ここにいちやあ邪魔？」

「いいえ、結構ですとも！ 静に奇麗にうまくしてあげますですよ」

ミセス・コムプソンは、雑巾や水を部屋に入れた。小さい敷物を先ず廊下に出した。それから、細々したものが一杯載つている化粧台の上を片づけ始めた。

化粧着を肩にかけたぎりなので、伸子は縫物をもつてまた坐つた。彼女の場処から、あちら向きのミセス・コムプソンの上半身がそつくり鏡に映つて見えた。同じ鏡に、すぐ横の窓枠の端と、勉強机の一部が矢張り映つてゐる。三月の晴々した午前十時であつた。寄

宿舎にもこんな時があるかと驚くほど建物じゅう森しんとしていた。伸子は、ちよいちよいミセス・コムプスンの方を見た。皺だらけの顔なのだが、頬骨の上のところが、まるで艶々と子供のように赤い。その赤い頬と唇に絶えず微笑の影を浮べ、背の高く平べつたい藍縞服の上半身を、お婆さんらしく右に捩つて反りかえらせ、楽しい仕事でもしているように働いている。――

伸子が寄宿舎に来てから三月経っていた。がミセス・コムプスンが部屋を掃除してくれる時に落ち合つたのはそれが始めてであつた。彼女は、暫して訊いた。

「――敷物なんかも貴女の受け持ちなの？」ミセス・コムプスン

「No, dear 敷物は一まとめにして、廊下を掃除する人が叩くんですよ。あれは力がいりましてね――私みたいにお婆さんになつてはもう駄目、駄目ですよ」

ミセス・コムプスンは、眼尻に深い皺を作つて笑つた。伸子は、彼女の云う廊下掃除受持の働く女というのをまだ一度も見たことがなかつた。伸子が会つたこともなくて、而もこの膨大な寄宿舎の生活、ひいて彼女の日常生活の必要を満している働き人は他にも沢山あつた。例えば、毎週火曜日の夜、扉の外に出して置く洗濯袋、それを翌朝八時か九時に伸子が目を醒し洗面に出る迄に運び去る人。何時頃來るのか、男か女か、子供か大人か、伸

子はちつとも知らなかつた。然し、土曜日には間違ひなくそれ等の洗物が、再び知らない人の手で寝台の上に置かれてゐる。そういうえば、第一階の大広間の、あのいつも白い大理石の床は、いつ、誰が拭いているのだろう。伸子は、眠られない、夜中によく耳につく道路掃除人夫の働く音を思い出した。深夜、七階の彼女の窓へ聞えるのは、ホースで水をはじかす音、ガリ、ガリと石敷道を何か金物の道具で引かく淋しい音ばかりだ。覗いても、燈の消えた向いのアパートメントの暗い窓々しか視野に入つて来ない。人は見えない。次の朝になると、上へ行くほど坂になり、涯には海でもありそうに展望を利かして、青空に折れ込んだ街路が、昨夜の記憶などけろりとなく横わつてゐる。そういう大都会独特な、姿のない働き人。伸子は不思議なような陰気なような気持がした。

伸子は、また訊いた。

「ね、ミセス・コムプスン、貴女もここに棲んでいらっしゃるの？」

「いいえ、私はつい近処に別に部屋を持つていますんですよ」

少し息ぎがするような調子であつた。

「家の方がたと？」

〔No, dear, I am living all alone.〕

「まあ——一人ぼっち？」

「ええ一人ぼっち——一人つきりなのです」

ミセス・コムプスンは、言葉の重みを計るようにゆっくり頷きながら答えた。が、赤い頬辺の微笑は、長者的な落付きで一層濃こまやかになった。彼女が、もう何十年かそういう暮らしをして来たことを、伸子は理解した。

「じゃあ淋しいわね、御飯だけはこちら?」

「ああ、それがね——どうもここに働いている者みんなが望んでいる通りに行きませんでね、困りますよ」

今まで、どこやら子供相手というふうに返事していたミセス・コムプスンの顔が俄に生氣を帶びて來た。彼女は、すっかり伸子の方へ向きなおり、本気な小さい声で訴えた。

「御承知の通り、ここには三つ食堂がありますでしょう、生徒がたの分だけでもね。それが一部屋でざつと八九十人の御賄を仕度なさるんですから、いつだつて十や二十、外出の方々の分が残つてしまふんですよ。——若い娘さんが、ドシドシ捨てていなさいますからね。どうせ捨てる物なら分けて欲しいと思って、ミス・ハウドンにも願つたんですけど

|

「駄目なの？」

ミセス・コムプスンは、亞麻色の束髪と一緒に、灰搔きのように骨ばった大きい手を、伸子の顔の前で振った。

「まるつきりお解りなさらないんですよ、あの方々には。私共の生活に、たつたそれだけのことどもどんな関係があるかね。餓え死しないだけの給料を払つてあるから、もういいとお思いなかもせんよ」

そこで、彼女は皮肉なような、悲しいような微笑を皺だらけの顔一面に湛え、猶小さい声で伸子に囁いた。

「——あの方々にはね、人生なんぞちつとも分つてはいないんですよ。寄宿舎から、学校、学校から寄宿舎、ね。活きた規則書というばかり！」

伸子は、襟カラをつけ終つた服に着かえ、鏡台の前で一寸工合をなおした。ミセス・コムプスンの掃除もすんだ。彼女は伸子の後に来た。

「貴女にはよくこちらの着物がお似合いですよ、それにいいものをお持ちだから」

「そうかしら——。どうも有難う。これですつかり埃がなくなつたわ」

伸子は、机の上の本など動した。ミセス・コムプスンは、直ぐ出てゆかず、寝台被のす

れをなおしている。——彼女が入つて来た時、伸子は珍しく会つたのだから、少し心づけをやろうと思つた。けれども、話しているうちに心持がこじれた。ミセス・コムプスンが、うまく同情させたと思うようでは厭だ。この次やろう。早く出て行つてくれればよいと、机や鏡台のところをぶらついたのだ。

ミセス・コムプスンは去り難そうにしていたが、やがて、

「—— Well……」

と呟きながら、やつこらと水桶を持つて敷居を跨ぎかけた。窓の方を向いたまま、伸子は思わず破顔した。いかにも、心づけなんぞは諦めた。というがつかりした婆さんの感情がありありと分り、ひとりでに好意が湧き出して來た。伸子は、いそいで机の引出しを開いた。

「一寸！ ミセス・コムプスン」

彼女は、日本の祝儀袋を見つけて、一弗入れた。^{ドル}

「これ」

反射的に前掛で拭いてさし出したミセス・コムプスンの掌に、朱と銀で麻の葉模様を出した小袋をのせると、伸子は、相手の訝しそうな視線に笑つて答えたぎり、ぴつたり、部

屋の扉をしめた。

寄宿舎じゅうが、攬き廻した石鹼水のように元気よく、活氣づき泡立つてゐる。夕飯時だ。廊下では、バタバタ駆ける跔音と一緒に、

「一寸！ 待つてつたら！ 直ぐだから」

と、高い鼻声で叫んでゐる声がする。伸子の部屋に近い、洗面所の戸が、盛に開閉する。すぐ隣の扉を誰かがノックした。

「フロラ、御飯は？」

中では、着換え最中らしく、こもつた声がきれぎれに答えた。

「あ、今。——私お客なによ今夜——」

伸子は、部屋に鍵をかけて、昇降機エレベーターのところへ行つた。もう四五人待つてゐた。どうかして昇降機がさつきから上つて来ないらしい。伸子が名を知らない金髪の娘が、癇癩を起し、

「どうしたのよ？ 一体

と頻りに柱の鉗ボタンを押しつけた。

「私、気が遠くなっちゃうわ、おなかがペコペコで……」

「おおお、可愛そうに！」

仲間の一人が、眞面目な顔面をし、緑色のジャムパアの衣^{ポケット}嚢から何か出してやつた。

「さ、これでもしやぶつておとなになさい、美味しいことよ」

誰もがおなかをすかしているので、思わず本気で^{つま}抓み出された物を見た。が、一時に足踏をして笑い出した。

「こりやあ素敵！ さ、おしゃぶりなさい。だけど少し塩がききすぎてるに違いないわね、どうも——ハツハツハツ」

手あかだらけの丸い消ゴムをやつたり、とつたり、騒ぎのところへ、すーっと昇降機が来た。來たが、満員で、隅っこにやつとハンドルを動している若者が、赧い顔をして何か断りらしいことを網戸越しに云つた。廊下と昇降機の中とで友達同志が手を振り合う。殆ど止らず昇降機は上つた。

「ひどい！ もうこうなりや覚悟するわ」

金髪の娘が、大袈裟な身ぶりで、裏階段^{はしご}を一段おきに駆け登りはじめた。伸子は、朝この階段を歩いて食堂迄登つた。そして、よく時間過て閉め出しをくわされ、寄宿舎の向い

側の喫茶店で焼林檎をたべた。

食卓で、二日ぶりに豊子に会つた。伸子は、ミス・ハウドンの心づかいで、わざわざ豊子の隣に席を貰つたのであつた。

「どう？　きのうはすっかりかけ違つたわね」

「ああ、私下町へ実験があつて行つていたから——新聞が来ましたよ。よかつたら見にいらつしやい」

「今夜はお暇？」

豊子は、癖で下顎を押し出すように合点しながら、先輩らしく答えた。

「——まあいいわ」

伸子のところから、台所と食堂を区切る四枚の扉が正面に見えた。二枚目の扉を、ぽんと爪先で蹴りあけては、大きな錫の盆にスープ皿を並べたのを持った給仕娘がこちらに出て来ようとしている。胸のところに、嵩ばつた重いものが邪魔しているので、脚が思うようにはびず、たつぱり蹴開かない。すぐ煽りかえす。も少しで盆迄ひっくり返しそうに戻つて来る。また蹴りなおす。——気になつてそつちを見ていると、左隣のミス・ホルフォードが、伸子に話しかけた。

「ミス・サツサ、貴女棕櫚箒お好き？」

「棕櫚箒？ 棕櫚箒がどうしたの？」

向うの角から、ミス・グレーが、ふき出したい顔をやつとしやんとさせて、^{たしな}窘めた。

「ドーラ！」

ドーラは、両方から弓形にくつつきそうな黒い眉の片方を挙げ、よくつてよ。という表情をした。

「ね、貴女お好き？」

伸子は、大体、食卓の仲間を好いていなかつた。見当のつかない顔をしていると、グレーがすけ太刀をしてくれた。

「——今夜、私どもは棕櫚箒を眺め通す光榮を得たんですよ」

あつち、あつち、と眼顔をする。そちらを見、伸子は苦笑した。

「お莫迦さん！」

一番端れの客卓子に、まるで棕櫚箒のような髪をした若者が食事をしていたのだ。ドーラは、グレーをつかまえ、伸子にはきき分けられない書生言葉で、なお先刻の続きを何か云つている。そしては、こつそりふき出す。——豊子は、一切知らない風で、傍を通る給

仕娘を呼びとめた。

「私にココアを下さいな」

種々な感情が映り、伸子は深い興味を感じた。

寄宿舎へ来る男の客は、下の広間でしか会えない。許可を得て準備が出来れば、八階の食堂で一同と食事することが出来た。伸子が来てから、そういう客は数人あつたが、どの人もまるで田舎者のように間抜けて見える若者ばかりであつた。また、そうでもなければ、こんながやがやした、不味さこの上ない寄宿舎の食事に来はしないだろう。招ぶ方も、招ばれる方も、都会馴れぬ人達らしかつた。それに、食堂掛の老嬢の好意か、客卓子は、いつも定つて部屋の一番入口近い端にあつた。幾十という、すばしこい、笑いたい盛の若い娘の視線が蜘蛛の網のように一点に注がれる。いやでも、伏目がちにしゃちこぼり、聖餐にでもあずかるように坐つてゐる若者を見ずにはいられない。さし向いで、これも、言葉渺く、背中へ神経を吸いとられてゐるの方にとつても、楽しい食事とは云い難いに違ひない。雀斑そばかすのある、本当に揃えたての棕櫚箒のような頭をした若者が、ひどく自分自身をもてあまし、重大な問題でも審議するように物を云つてゐるのが、伸子には少し気の毒に思えた。

伸子は、豊子と食堂を出た。彼女達は、昇降機の前で立ち止つた。

「——どうせすぐまた降りなけりやあならないから、もう下へ行つていいわ」
「それでもいいわね」

七時四十分から、下の客間で集りがあることになつていたのだ。

集りは三十分ほどで済んだ。あけ放した観音開きの扉から、浮かない顔付の娘達がぞろぞろ出て来る。先へ出た伸子は、豊子を待つた。豊子は、今年卒業する学生の一人と話しながら来た。

「さようなら、じやあまた明日。大丈夫ですよあのテストは、相手によつて難しいんです
もの」

伸子は、豊子と並んで歩きながら云つた。

「私不愉快になつちやつたわ、何だか」

豊子は、冷静な表情で伸子を見た。

「——誰も好きな人はいないわ」

「デリカシーだの何だのつて云う癖に、ああいうことは平気なのね、厭だわ」

ミス・ハウドンは、学生達を集め、最近必要と思われた種々の注意を与えた。人目を牽

くから門のところに何時までも立つていてはいけないとか、たとい大好きな人とでも cheek to cheek dance は踊らない方が見よいとか。一つあつちこつちで忍び笑いを起した注意があつた。よく愛人に誘われて芝居や夜会に出かける人がある。十二時過て帰つて来るのはよいが、広間まで相手に送りこまれても別れきれず、隅っこに立つてまたそれから永いこと囁いたり、何かしている。それはどうもいい癖とは云えない。

「それまでにたっぷり楽しんでいらつしやるのですから、これからそれは誰でもやめて下さい。玄関にいるミスター・ワーボーンにしたつて多分余り嬉しくはないでしようしね」

ワーボーンは、六時頃から玄関番を勤める、クレマンソーのような髭の、大きな爺さんであった。彼は、つい傍で、幾組もの若者たちが縋れ合つているのを揺つたく感じながら、その堂々たる髭をぴくりともさせず、帰舎時間の記入された外出簿を眺めて坐つていなければならぬ。——寄宿舎らしい漫画的おかしさで、伸子も笑つた。

「さて、もう一つ申すことがあるのですが——洗濯場で昨日シーツを一枚めちゃめちゃにして突込んであるのが見つかったのです」

ミス・ハウドンは、後を振向き、彼女の秘書のような役をしている学生の一人に何か合図をした。

「これなのです——誰か心覚えがありますか」

白いブラウズを着たその娘は、指図とともに腕一杯に敷布を一同の前に拡げ示した。敷布は、真中に大きい汚染があり、きつい火熨斗のしを掛けそこなつた焼けこげがついている。

伸子は、何だか正視するのが辛いように感じた。
「あなたがた、若しお母さんの家にいらしたら、シーツをこんなにして知らん顔でいますか？ そうではないでしよう？ 私はここのお母さん役なのだから、家にいると同じに振舞つて欲しいのです」

ひどい様子の敷布は、煌々としたシャンデリアの下で凝つと拡げられたままだ。

「どうか隠しだてはしないで下さい。——本当に心あたりのある人はありませんか」

伸子は、余りいつまでもきたない敷布を見せられるので、次第に苦々しく腹立ちを感じた。何故そんなことになつたか、誰でも見当はつく。二十越した娘ばかりなのだから、どこかに当人がいれば、簡単に言葉で云つただけで充分思い知らせる目的は達すであろう。あくどいやりかたが、伸子に強く嫌厭を与えた。シーツをつくねて置いた娘より、そうやつて、威儀を整えた厳しい顔でそれをわざわざ拡げて見せて平氣な者の方が、彼女には遙に憎らしかつた。

「——思い当る方は、それでは後ほど私のところに来て下さい」

ミス・ハウドンは、軽く頭を動した。やつとシーツがしまわれた。吻^ほとした空気が一
どに感じられた。漠とした不快、ミス・ハウドンの処へ行く者などあるまいという見越し。
皆いやな顔で、言葉寡^{すくな}に客室を出たのであつた。

伸子は、気が鬱し、真直再び狭い室に運びあげられる気がしなかつた。

「歩いて登らない？　あなたのところまで——」

豊子の部屋は四階にあつた。

「ね、飯島さん、私やつぱり寄宿舎は嫌よ」

「——多勢人がいればどうしても自分だけ都合よくは行きませんよ」

「——でも——うるさいわ。——男の学生の寄宿舎でもこんなもののかしら」

石の段々を、登つては曲り、曲つては登つて行くうちに、伸子は汗ばむ位体じゆうが暖
くなつて來た。それにつれ、不機嫌もどうやら解れ始めた。考えて見れば、太つた体に肉
桂色の絹服をつけ、鼻眼鏡をかけたミス・ハウドン。その傍に、皇后旗でも捧げるよう
に拡げられた焼こげ大シーツ。怒つた仔猫のようにむつとして、半円形に坐つた沢山の学生
が一斉にそれを睨んでいる悲愴な光景を、壁が見物したらどんなにおかしかつただろう！

——いきなり、伸子はさも嬉しいことを発見したように、階子を駆けつけて豊子の肩に手をかけた。

「ね、あなたクランフォードを読んだ?」

彼女は、ほくほく、悪戯^{いたずら}しきな眼を輝してつづけた。

「そつくりじやあない? 心持が。——ね? ね?——こにもあるのよ! クランフォードが……」

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第一巻」新日本出版社

1979（昭和54）年6月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第二巻」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「文芸春秋」

1926（大正15）年2月号

入力：柴田卓治

校正：原田頌子

2002年1月23日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

七階の住人

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>